

サム・ソーン氏、ジャパン・ハウス ロンドンの 新館長・CEO に就任



ジャパン・ハウス ロンドンを運営するジャパン・エイチ・エル・リミテッドの取締役会は、イギリスの美術館ノッティンガム・コンテンポラリーの館長であるサム・ソーン氏を2022年10月17日付でジャパン・ハウス ロンドンの新しい館長・CEOに任命することを発表しました。

個性的で広く評価されているジャパン・ハウス プロジェクトは、ロンドンの目抜き通りに日本文化体験を持ち込み、日本との出会いと驚きを身近な形で来館者に提供するというビジョンをもって始められました。

サム・ソーン氏の前任で、10月末に退任する初代館長のマイケル・フーリハン氏は、当初のコンセプト作りの段階から指揮を執り、ジャパン・ハウス ロンドンを人気文化施設として大きく成長させました。クリエイティブなアイデアを具現化し、世界各国で文化機関の強力な組織基盤を築いてきた豊富な経験を持つフーリハン氏は、ジャパン・ハウス ロンドンのチームを率いて14の展覧会と650以上のイベントを開催し、2018年6月のオープン以来、合計120万人の来館者を魅了してきました。現在では、オンラインでもさらに多くの国際的なオーディエンスを惹きつけています。芸術・文化領域で影響力のある人物として芸術、学術、ビジネスの強力なパートナーシップを構築するフーリハン氏の手腕のおかげで、

ジャパン・ハウス ロンドンは、ロンドンの文化シーンの中で確固たる地位を築いただけでなく、日本と英国、さらにはヨーロッパの間で有意義な関係を発展させる触媒としての役割を果たすに至っています。

フリーハン氏は次のようにコメントしています。

「私は、このユニークなプロジェクトに過去6年間にわたって参加できたことを光栄に思っています。ジャパン・ハウス ロンドンを、小さなオフィスで生まれたコンセプトから、今日ロンドンの人々に幅広く楽しまれている活気に満ちた革新的な文化施設へと発展させることができました。ジャパン・ハウスは、2018年のオープン以降、日本の真の文化やストーリーを表現するための最高の空間として、その地位を急速に確立しました。過去2年間はコロナ禍による混乱があったものの、ジャパン・ハウス オンラインという全く新しいデジタル空間での試みによって、当館の存在感はさらに強まりました。」

バトンを引き継ぐ新任のサム・ソーン氏は、過去6年間にわたり、英国有数の現代美術館であるノッティンガム・コンテンポラリーを統括し、展示、イベント、研究、物販、食事などのさまざまな文化体験を組み合わせた斬新なプログラムを提供してきました。これらはすべて、ジャパン・ハウス ロンドンでの体験を実現するために不可欠な要素でもあります。ノッティンガム・コンテンポラリーは「2019年ミュージアム・オブ・ザ・イヤー」の最終選考に残り、ソーン氏は、『アポロ』誌の「40 Under 40」（40歳以下の40人）で最も影響力のある世界の思想家の一人に選ばれました。ノッティンガム・コンテンポラリーの館長就任以前は、テート・セント・アイヴスの芸術局長や『frieze』誌の共同編集者としても活躍してきました。

ソーン氏は、世界各地の博物館や美術館と協力して、ポール・チャン、ララ・ファヴァレット、ウー・ツァンなどのアーティストの個展を数多く企画し、スピリチュアリズムから陶芸まで幅広いテーマの展覧会を演出してきました。受講料無料の芸術学校 Open School East の共同設立者であり、「*School*（2017年発行）」の著者でもあります。幅広く講演や授業を受け持った経験も有しており、複数の芸術専門誌に定期的に寄稿しています。

このたびの就任について、ソーン氏は次のようにコメントしています。

「ジャパン・ハウス ロンドンで館長・CEOを務めることとなり、大変うれしく思っています。個人的な話をしますと、私は日本とその文化に長らく関わってきました。子供の頃、日本語を話す母に連れられて初めて訪日して以来、日本全国を広く旅してきました。その過程で、日本のアーティスト、ミュージシャン、建築家などとのコラボレーションや対話を行ってきました。テート・セント・アイヴスでは、日本と英国の陶芸作りの関係を探る展覧会を企画しました。国境を越えた対話と文化交流がかつてないほど重要性を増している現在、ジャパン・ハウス ロンドンは、未来の対話とパートナーシップを形成する上で理想的な立場

にあると思います。初代館長マイケル・フーリハン氏の素晴らしい業績を基に、チームと一緒にこの新しい章をスタートさせることを楽しみにしています。」

ジャパン・ハウス プロジェクトは、その誕生以来、日本デザインセンター代表で著名なデザイナーでもある原研哉氏がプロデュースのアドバイスを行ってきました。原氏は次のようにコメントしています。

「マイケル・フーリハン館長の、ジャパン・ハウスの意義及び日本文化に関する深い理解と、それを前提とした適切な運営によって、ジャパン・ハウス ロンドンは本国に欲しいほどの文化施設に育ちました。新館長には、ぜひこの精神を受け継いでいただき、日本文化への覚醒の場としてこの施設が機能し続けるよう期待いたします。」

-本文ここまで-

本プレスリリースについてのお問い合わせ先

報道関係お問い合わせ先:

飛驒 香生里 Kaori.Hida@japanhouselondon.uk

伊佐 ハイディ Heidi.Isa@japanhouselondon.uk

編集者向け注

ジャパン・ハウス ロンドンについて

ジャパン・ハウス ロンドンは、日本の最先端の優れた文化に触れる機会を提供する文化施設です。ロンドンのケンジントン・ハイストリートで、真の日本との出会いを演出することで、日本通のゲストをも魅了して驚かせます。日本の芸術、デザイン、食文化、イノベーション、テクノロジーの粋を紹介し、日本のあらゆるものへの理解を促進します。グローバルな取り組みの一環として、サンパウロとロサンゼルスでもジャパン・ハウスが運営されています。

-以上-